

13) クッシング病における経大腿静脈的海綿静脈洞サンプリングの検討

田村 哲郎・西巻 啓一 (新潟大学脳神経外科)
 皆河 崇志・田中 隆一 (新潟大学歯学部)
 岡本浩一郎 (歯科放射線科)

Cushing 病で venous sampling は、異所性 ACTH 産生腫瘍との鑑別のみならず、下垂体腺腫の局在診断のためにも広く行なわれている。両側同時に下錐体静脈洞 (IPS) で sampling し、CRF 負荷を施行しても局在診断の信頼性は低い。その原因として IPS は下垂体から離れており、途中で左右の交通が豊富にあること、腺腫の drainer 側のみしか考えていなかったことが考えられる。そこで 3.2F microcatheter を用いて海綿静脈洞から直接 sampling を行い、正常下垂体の drainer 側をも推測する目的で、CRF+TRH 同時負荷をし、ACTH, PRL, TSH および GH を経時的に測定した。2例に施行し、1例では ACTH のピーク側と PRL, TSH のピーク側が異なっており、下垂体腺腫が ACTH のピーク側にあると推測できたが、もう1例ではすべて同一側でピークを示し、腺腫の局在は推測できなかった。また2例とも GH の奇異性反応が海綿静脈洞でのみ認められ、PRL や TSH のピーク側と同側のため正常下垂体からの分泌と思われた。

II. 特別講演

「下垂体疾患診療の進歩」

東京女子医科大学第二内科教授

出村 博 先生

新潟大学医学部精神医学教室 同窓会集談会

日 時 平成3年10月19日 (土)
 午後1時より
 会 場 ミナミプラザホテル
 3F ロイヤルホール

I. 一般演題

1) 一人ずもうから共有へ —慢性分裂病者への15年間の関わり—

吉田 辰弘・田宮 崇 (田宮病院)
 乾 吉佑 (慶大精神神経科)

精神分裂病治療の困難さは改めて言うまでもないことであるが、中でも、訴えも乏しく、目立った行動化もなく、日常生活を淡々と送っているような患者の場合には、治療者はどのように関わって良いのか戸惑い、イラ立ちが強まる。その結果、治療者は一人であれこれと思い悩み、一人ずもうをしてしまい、患者と共に治療関係を共有することが困難となる。今回演者はそのような慢性の破瓜型分裂病者に15年間関わったので、その精神療法過程をまとめ、以上の点を考察したい。

患者は現在46歳の女性患者である。中卒後、県外に就職するが、半年で発病、他病院に入退院を繰り返していたが、本人31歳時、当院に入院、現在も入院中である。

面接経過を一応、四期に分けて述べるが、この分け方は治療者の逆転移を通して見た見方である。

第一期、一生懸命関わろうとした時期

面接を開始して2～3年の時期である。初め、演者は出来るだけ患者から話を聞こうとした。しかし患者は非常に寡黙で、全く話はしなかった。そこで演者は、問題を整理すべく、患者に来院動機などを聞いていった。

第二期、関わることにうんざりした時期

ところが、患者は思ったほど自発的に話をせず、沈黙している態度が続いた。次第に演者は、この患者の態度にがっかり、うんざりし、投げ出したい気持ちになっていった。この間7～8年が経過している。

第三期、患者の自閉をそのまま受け入れた時期

演者は、〈自閉傾向を持った患者なのだから、自閉を尊重しても良いかもしれない〉と、考えるようになった。そこで演者は出来るだけ患者に期待したり、無理に話させたりしないようにゆったりした気分でいようと試みた。この間2～3年が経過している。